

## 序文

“歴史とはまさしく「時(クロノス)」に対する気高き戦であると言えよう。それは、彼の捕虜となった、いやすでに死体となりはてた歳月を、その手から奪い返し、蘇らせ、閲兵し、再び戦列へと復帰せしめることに他ならないのだから。しかしそのような戦場において多くの棕櫚と月桂樹を手にする偉大な勝者[歴史家]は、最も壮麗高貴な亡骸のみを奪って、そのインクで君主や権力者、名高い人物の功績を剥製となし、才という優雅な針で金糸や絹糸を操って彼らの煌々たる行いの永遠なる刺繍を施すのである。しかるに、無力な我が身では、このような主題に挑み、政治的陰謀が渦巻き軍隊の喇叭の響きわたる迷宮を経巡って険しい頂に登ることはかなわない。ただ、取るに足らぬ卑しい人々の身に起こったことはいえ、記憶に値する出来事を知り及んだがゆえに、率直にありのまま物語、乃至は報告にして、その記憶を後世に残そうと筆を執ったばかりである。その報告の中では、狭隘な劇場において痛ましい恐怖の悲劇、壮大な悪辣の場面が上演され、幕間には、悪魔的所業に抗する徳高き偉業と天使の善良とを目にすることになる。まことに、この我らの国々が沈まぬ太陽、我らがカトリック王の庇護下にあり、そこを預かり治める高き血統の英雄が、欠けることなき月のごとくその上に反射光を降り注ぎ、偉大な元老院議員たちが恒星のごとく他の尊き行政官たちは迷い星のごとく随所に光をとどけて、いと高き天上を構成していることに思いを巡らせるならば、それが向う見ずな人間たちによって暗い企み、悪行、虐待の増え続ける地獄へと変化するのを目の当たりにすることとなる原因は、悪魔の仕業・術以外には考えられない。それというも人間の悪は単独では、アルゴスの眼とブリアレスの腕をもって公の利益のために奔走してまわっている数々の英雄たちに太刀打ちできるはずがないからである。したがって、我が若かりし頃に起きたこの物語を描写するにあたり、そこでそれぞれの役割を演じた登場人物たちの大部分は運命の女神に納めるべきものを納めてこの世の舞台から姿を消しているとはいうものの、相応しい敬意を払って、彼らの名前、つまり家名は伏せられるであろうし、また地名についても同じく、ただ一般的な地域を示すのみとなる。このことを捉えて、物語が不完全であり、それが我が粗悪な作品の欠陥であると言う者はおるまい、そのように評価を下す人物が哲学に全く無知でない限りは。というのも、この学問に通じている人ならば、こと本質に関する限り、この語りに何の欠けたるところもないことはよくわかるはずだからである。何となれば、明白かつ誰にも否定できないことであるが、名前というのはひたすら純粹な偶有にほかならず...”

「だが、私がこの色あせて引っかけ傷だらけの手稿からこの物語を書き写すという英雄的労苦に耐え、そしてこの物語を俗に言うように《世に送り出して》みたところで、そのあとそれを読む労苦に耐える人が見つかるだろうか？」

このような疑念が、偶有という語のあとに続くインク染みのような字の解読に骨を折っている最中に生まれ、私は書写を中断し、どうすべきかより真剣に考えるにいたった。「確かに、——手稿の頁を繰りながら、私はひとりごちた—— 確かに、奇を衒った比喩や文彩の雨あられはこ

んなふうには作品全体にわたって続きはしない。この17世紀の書き手ははじめのところで自分の能力を披露しようとしたのだ。だがその後、叙述が進むにつれて文体はずっと自然で平易に流れ、時には長きにわたってその調子が保たれている。それはそうだ、だが何たる凡庸！何たる品のなさ！何たる間違いの多さか！おびただしい数のロンバルディア方言、不適切に用いられたフレーズ、気まぐれな文法、節の関係がおぼつかない構文。それからあちこちにちりばめられた雅やかなスペイン語、そしてもっと酷いのが、物語中で最も恐ろしいあるいは哀れを誘う箇所、驚嘆を呼び起こすか、あるいは読者に考えさせるあらゆる機会に、つまり確かに少々のレトリックが、ただし控えめで上品で趣味のよいレトリックが必要となるくんだり全てで、この男はこの緒言のようなやつを投入するのに余念がないのだ。そして驚くべき能力を発揮して相反する性質をごた混ぜにすることにより、ひとつの同じ頁、同じ文、さらには同じ語までを、粗野でありながら同時に気取ったものにする方法を見つけ出すのである。さあ、そうなると、仰々しい誇張表現が粗雑な文法上の誤りでもって練り上げられ、まさにかの世紀のこの国の文章の特徴である、あの野心的な無骨さが満ち溢れる結果となる。実際のところ、きょう日の読者に見せられるような代物ではない。彼らはとても抜け目がない上に、この種の風狂にはあまりにうんざりしているのだから。良かった、この忌まわしい作業をいくらか進めないうちに正常な考えに立ち至ったのはもっけの幸いだ。よし、さっさと手を引こう。」

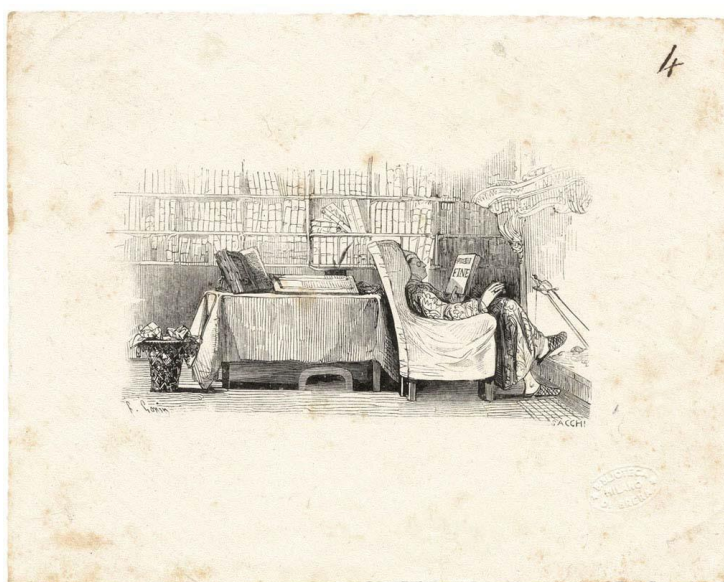
しかし、この仮綴じの本を閉じて片づけようとした、まさにその時、これほど美しい話が世に知られぬまま埋もれてしまうのが残念に思われてきた。というのは、物語である以上、読者によっては好みが分かれるかもしれないが、私には美しいように、いや大変に美しいように思われたのである。「この手稿から一連の出来事を取り出して文章表現をやり直してはどうだろうか」と私は考えた。合理的な反論が思いつかなかったので、決断はすぐになされた。この本の起源は以上のようなものであり、それがこの本自身の価値と同じくらいの純朴さで明らかにされたわけである。

しかし、我々が著者の描くこうした出来事や習慣には、我々にはあまりに新奇、珍妙——これ以上は言わないでおくが——なものがあると思われたので、彼を信用する前に、我々は別の証人に問うてみたいと思った。そこで我々は、世の中がその頃本当にそのように進んでいたのかはつきりさせるために、当時の史料の探索に取りかかった。こうした調査によって、我々のあらゆる疑念は晴らされた。我々は随所で類似の事象や、されには一層強烈な事象に行き当たったのだった。そして、より決定的だと思われたことには、それまで我々が手稿以外から何らの情報も得られなかったためにその実在を疑っていた幾人かの人物までも発見したのである。そこで、あまりの奇妙さゆえに読者が否定したくなりそうな事象に関しては、信用を得るため必要に応じて、それらの証言のあれこれを引用することにしたい。

ただ、我々が著者の言い回しを耐え難いとして拒んだ以上、我々はそれをどのような言い回しに置き替えたのか、これは重要な問題である。

頼まれもせず、他人の作品を作り直そうとする者は誰であれ、自分の作業をきっちりと説明すべき立場にあり、何らかの意味でその責務を負うことになる。これは現実にも、また法的にも

規則となっており、我々としてもこれを免れようというつもりはつゆほどもない。それどころか我々は、この決まりに自ら進んで従って、我々が採用する書き方の道理をここに詳細に説明しようとしていた。この目的のために、作業の全行程において、生じ得るあらゆる批判を予測し、その全てに反論を準備するよう心掛けた。これにはさしたる困難はなさそうであった。というのは、（これは事実を正直に述べるのであるが）我々の頭に批判が思い浮かぶときはいつも、それに打ち勝つ反論と一緒に思い浮かんだからである。それらの反論とは、問題を解決してしまうと言うより、問題を変換するような性質のものであった。あるいはまた、二つの批判を互いに戦わせることにより、一方に他方を打倒させた場合も少なくない。あるいは、それら二つを徹底的に吟味し、注意深く検査した結果、一見したところ鋭い対立と思われたものが、実際には同種の主張であり、いずれも判断が立脚すべき事実や原則を顧みていないことに起因する批判であることを発見し、論証することができた場合もある。こうして双方の大きな驚きのもとに両者を一緒にして、まとめて追い払ったのであった。これほど明白に上首尾にやったと感じた著者はかつていなかったのではなかろうか。だが、何としたことか。こうした異議と反論の全てを集め、整理をつけようという段階になってみると、何たることか！それらは一冊の本になってしまうではないか。こうした事態に鑑み、きっと読者も納得してくれるであろう二つの理由から、我々はこの考えを棚上げすることにした。一つ目の理由は、一冊の本を、というよりその本の文体を、正当化するために本がもう一冊あるという事態は、馬鹿げたものに見えるのではないかということであり、二つ目は、本というのはいかに一冊で十分であり、それでも有り過ぎるくらいだということである。



“Immagini manzoniane, bozze delle illustrazioni per l’edizione de “I Promessi sposi” del 1840”: 004, a cura di Guido Mura e Michele Losacco. Biblioteca Nazionale Braidense (Biblioteca digitale - Progetto Dire): <http://www.braidense.it/risorse/dire.php>

*I promessi sposi (1840); Storia della colonna infame, in I romanzi, a cura di S. S. Nigro, Milano, Mondadori, 2002; vol. II, tomo II, pp. 5-8.*